英国リーダーシップ研修に参加して

愛媛大学　　越智　英恵

８月９日　１日目

北京オリンピックの開会式の翌日、日本の空の窓の一つである、「成田空港」から、筑波技術大学の学生、先生、通訳の方、計９名で日本を発ちました。香港で乗り継ぎ、目的地のロンドンのヒースロー空港への空の大移動は約１８時間かかり、無事に到着しました。

◇ 香　　港：　乗り継ぎ時間だけでも北京オリンピックに行けないのか、なんて野望を抱き、香港の景色を空港の窓から眺めていました。山と海で向こうが見えないのでこっちの方向が北京かな、と日本選手の皆さん頑張って！とテレパシーを送って、ロンドン行きの飛行機に乗りました。

◇ ヒースロー：　成田空港がいくつ分あるのだろう？と気になるほど、初めて見る広さの大きい空港でした。本当に言葉も出ず、驚きでした。もし１人で来ていたら間違いなく飛行機に乗れないな、と引率して頂いていることに感謝しました。

ロンドンに２２時頃に到着すると、中国チームが先に到着していて、寒いのに待ってくれていました。中国チームと一緒にバスで宿泊所へ移動し、いよいよ部屋へ。部屋のドアを開くと、２つずつの大きいベッドや机、ダンスがあり、予想を超えて大学の研究室よりも広いことに驚き、目が覚めてしまいました。こんな広い部屋で泊まれるとは思いませんでした。仕切りはないけど、プライベートが守られそうで、ゆっくりリラックスできそう、と感激！安心！でした。さらに、シャワーとトイレが部屋の隣にあり、快適に過ごせそう！と「ココで研修が明日から始まるのだ」とイギリスにいることを実感し、朝がくるのが待ち遠かったです。ベッドは固くなく、朝はゆっくりだったので、結構スヤスヤと眠れました。

８月１０日　２日目

①　各国グループの紹介

初対面ということで緊張しましたが、日本人らしく、日本手話で自己紹介をしました。自分の中では今日からの１週間、アメリカの大学の先生の講話や他の国の学生との団欒、発表を楽しみながら過ごし、自分の糧になるような研修にして帰ろう、と抱負を誓いました。

②　ハーストモンソー城ツアー

１週間お世話になる城のツアーってどんなことがあるのだろう、と楽しみでした。

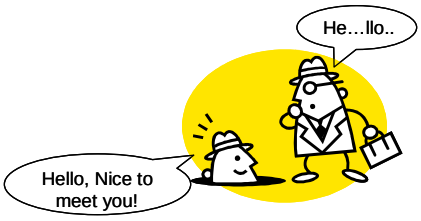
貿易、奴隷、と歴史の勉強にもなりました。また、結婚式場としても使われ、ヨーロッパの中で最初に作られたレンガの古いお城でもあり、とんでもないところに来てしまったかな、と思いました。

お城といえば、幽霊などの怖いイメージがありましたが、このツアーがあったおかげで、お城に親近感が湧き、研修にも快く参加できました。本当に、研修中は有意義に過

ごすことができました。

③　紹介ゲーム

１人の他国の学生と自己紹介・好きなもの５つを紹介して覚えてもらうのを、人数を増やしながら友達の輪をひろげていく、という方法でした。最後にはグループごとに発表していきました。



私は最初が中国の学生でした。名前だけは大学１年目の時に第二外国で習った中国語で「yue chi ying hui」と書いて見せました。「OK！！」と言ってくれた時は、初めて中国語を生かすことができたのが、嬉しくて中国語を選択していて良かった、と思いました。

また、英語を書いたり、ジェスチャーを使ったり、と方法を探りながら自分のことを「伝える」ことが新鮮でした。時には、ミカン，ありがとう，などをそれぞれの国の手話で表現をしました。表現の方法と意味が違う、似ているところがあり、不思議で面白かったです。

④　各国グループによる、ろうリーダーの紹介

私達日本チームは薬剤師の早瀬久美氏を選び、署名運動から法律を変え、それには彼女の夢を諦めない気持ちがあったことなどを紹介しました。

中国は中国民族舞踊「千手観音」の先頭に立った人物、邰麗華(タイリーファ)さんでした。日本でもテレビで紹介されているのを見たり、公演も見に行ったりしました。インターネットで調べると、彼女はニューヨークのカーネギーホールとイタリアのスカラ座という二大殿堂の舞台を踏んだことのある、唯一の中国人だそうです。公演で見た時も思ったことですが、本当に彼女の存在感は言葉に表せないけど、凄かったです。人物になりきっていて、眼を奪われ、心は惹かれました。

アメリカは障害者の生活を保障するための法律『ADA 法』に関わった人物、リチャード、ロシアは旧ソ連時代に宇宙開発に関わっていた人物、カルチンコでした。

どの国も、人物を取りあげて、流れ(時代背景など)と関連しながら紹介されていたので興味深い内容でした。テレビで見た時より、大学の講義で習った時より以上に勉強をした気がしました。キーワードをメモしたかったのですが、通訳に釘付けで、どれがキーワードになるのか分からなかったのが残念です。キーワードを掴むコツを研究しなければ、と思っています。

アラン先生を含めて紹介されたどのリーダーにも存在感を放していることは共通しています。先頭に立って、１つの道を開けたことで、後に継ぐ後輩達も同じように道を歩むことができるようになっています。そのことを私たちは知る必要があり、さまざまな分野で活躍している人を知り、次世代へ伝えていく役目を私たちは担っていると思いました。研修初日ながら学ぶことがたくさんあったので、どんなことがあるのだろう、と次が楽しみだな、とワクワクでした。

８月１１日　３日目

①　聴覚障害者リーダーを育てる

アラン・ヴィッキー夫婦による講話でした。アラン先生はろう両親、ヴィッキー先生は聴両親の元に生まれ、育ち・環境・教育の全てが違っていました。ヴィッキー先生はアラン先生と出会ってから、手話を覚え、活動にも参加していくようになったようです。

また、ヴィッキー先生の家にアラン先生が来たとき、デフファミリーの中で育ったアラン先生は聴者ばかりの中で一緒に会話することもない状態に怒りを押さえられず、怒鳴ったというエピソードもありました。
　アラン先生はろう者の両親に連れられて色んな行事に参加し、記憶があるときからろう者のモデルをたくさん見てきて、ヴィッキー先生もアラン先生をはじめ、モデルを見てきた、と言っていました。アラン先生とヴィッキー先生のそれぞれがこれまでの活動の経験を通して、必要なことを話していました。経験は土台づくりであると言っていたので、いろんなことを知るためにも考えて行動をできるようにしたいです。

②　コミュニケーション
　デカロ夫婦の熱演がとても分かりやすかったです。５つのタイプのそれぞれの立場のうち、各国で１タイプずつ考えて発表しました。さまざまな考えをもつ人がいる、相手の話を聞くことも必要ということとを考える時間でした。

③　異文化の理解
　日本の写真はお茶碗にお箸が突っ立っている氷でした。ありえない光景だっただけに、インターネットで探したのも大変だっただろうけど、その写真を作ることの方が大変そう、と感心してしまいました。普段意識していないだけに、皆に理由を説明するのも分かるように、と工夫することも楽しかったです。皆頭をひねるほど考えて答えて、自国の人は誇りを持って説明していました。
　違えば、異文化と言われ、その異文化を理解することも人間関係を持つ以上必要だと思いました。聴文化、ろう文化と言われているのもそうです。強制に一方的ではなく、伝える気持ち、互いが知りたい気持ちを持ちながら、歩み寄ることが必要なのです。まずは、違うことに気づき、伝えようと考えることが大切ということを考えました。

④　日本財団の石井さんによる講話
　「日本財団」という文字は頻繁に見ることがありましたが、どんな会社なのか、活動をしているのか、と言うのは知りませんでした。アジアの国々でろう教育を推進するために資金の援助から教師養成をしている、とベトナムのろう学校を例に挙げていました。
　ベトナムでは中学・高校の卒業が認められるには、全国統一の卒業資格試験に合格する必要があるようです。日本財団がサポートしている、ベトナム手話とベトナム語のバイリンガル教育手話で教育を行う聾学校からも数名受けるようになりました。第１期生の中には１人の中学生が上位の成績を納め、その後も、ある省でトップを取る、といった優秀な成績を納める学生もいるようです。最近では第１期生が高校の卒業資格試験の受験も始まり、合格してベトナム初の聾学生の大学進学が始まった、とベトナムでもろう教育が進められるようになった、という内容でした。
　日本でも青年海外派遣隊、NGO などアジアで活動していることは知っていましたが、現携わっている方の話を聞くのは初めてで、調べるだけでなく講演か直接、現状を聞くことも必要、と思いました。

⑤　日本の文化紹介
　福笑いと二人羽織を紹介しました。両方とも各国グループから２名ずつ出て、他の国の学生とペアを組み、体験してもらいました。
　福笑いは、最初のペアが丁寧に測りながら置いていっていたので、後に継ぐペアも慎重に挑んでいました。パーツを受け取ったら、即効で・１回で・置くなど、ルールも用

意しておくべきだった、と思いました。
　二人羽織は、ろうペアと聴ペアのやり方の違いがあって見ている側も楽しめ、会場が盛り上がりました。聴ペアの場合は声を掛けあいながら、入れる側がふざけてどんどん入れていました。ろうペア場合は入れる側が顔を触れ、入れられる側は首を振って合図を送りますが、なかなか通じなくてどんどん口の中に食べ物を入れられる場面がほとんどでした。食べ物は梅、せんべい、飴などの日本のお菓子を出し、梅を食べた人は酸っぱがっていました。私も実際に見るのが初めてだったので、相性もあるのかな、なんて思いながら見ていました。残念ながら、ろうと聴のペアはありませんでしたが、どのペアでも楽しめるゲームということは確かでした。

８月１２日　４日目

①　聴者が抱く聴覚障害者に対するイメージと実態
　講師のパトリシア先生は両親がろうで、いわゆるコーダである。彼女は生まれたときから、ろう者と接してきています。彼女両親だけでなく、祖父と親戚の中にも数人がろう者で、博士号取得、教師などの仕事に就いて働いているのを見てきているので、「ろう者にできないことはなく、できることを見てきた」と言っていました。
　「ろう者が就くのは困難と思われる仕事は何か」という課題について各国グループで話し合いました。発表にはパイロット、救急助命士、自衛隊などの仕事がありました。実際に消防士や弁護士、医師などの仕事に就いているろう者も数名いることを挙げ、環境だけでなく人を変えることも大事、と言っていました。そして、学べる・働ける環境にする必要があります。考えてみると、確かにまずは人を変えなければ環境も変わらないのが現実です。私も今までに、私と出会った事で変わった、と言われたことがありました。
　人を変えるには、どのようなことが必要なのか。日本のリーダー紹介が例に取り上げられ、知り合いに相談することから、ろうあ連盟や周りの人、知らない人と波のように拡がっていくこともあると。何が必要なのか、考えることが大事、ということを学びました。

②　誰でもリーダーになれる
　ゲームを通して、誰でも先頭に立って人をひっぱることができる、ということを教わり、私も言われて始めて誰でもできることを考えました。「人は見かけによらぬもの」という言葉があるように、１人１人が違った能力を持ち、その力を見出すことも必要であることに気づかされました。陰のリーダー、ある分野でのリーダー、とさまざまな人がいてこそできるのだと思いました。また、ゲームもしている側も見ている側も楽しめ、ゲームをあまり知らないので、もっと知りたい、とも思いました。
　ゲームの後は、乗っている船が沈没して５人の救急ボートに乗らなければならなくなった時、５人の人は外さなければならないが、どの人を外すか、というのもありました。設定されていたメンバーには、老人、子ども、学者、お坊ちゃん、オリンピックの選手、ろう者などです。優先順位だったり除去法選択だったり、と考え方も違っていました。限られた時に何が必要か、というものでした。

　総合的にみると、リーダーシップには何か必要なのか、ということを考える時間だったと思います。

③　白澤先生

筑波技術大学の学生３人は前に移動して、目を輝かして、真剣な眼差しを先生に注ぎながら聞いていました。そして、白澤先生も彼らに伝えたいというのが分かりました。
私も大学に入学してから本当に友達に恵まれ、実習でも友達から支えられ、先生の講演を聞いて友達を大切にしていきたい、と再確認することができました。

④　America ＆ China　文化紹介
アメリカの広い地域についての紹介と西部風の服装を着て踊りを披露していました。アメリカの地域は社会で貿易や出産で習って知っている地域名もちょこっと出てきました。「知っている」から「へぇ、こんなこともあるのか」に変わり、興味をもちながら見ていました。お菓子も配られて食べましたが、本当に甘かったです。
中国は中国伝統の踊りや書道(水墨画?)を披露していました。踊りは道具をしっかり揃えていて、気迫があって、皆釘付けでした。書道の方も腕があるんだぁ、と感心でした。内心で「さすが本場の中国！」と、書道が苦手というのもあって自分は海外で書道を披露しない方が良い！と心得ました。（書道っていうのは不思議と落ち着かせてくれるので、得意な人はどんどん披露した方がいいですョ。）

８月１３日　５日目

ロンドン観光の日。イギリス女王が住むバッキンガム宮殿、ビックベンなどの観光所を回りました。電車に乗り、研修ばかりでなくミニ旅行をすることもできて良かったです。

８月１４日　６日目

①　目標設定と達成について
将来、自分はどんなことがしたいのか、また、したいことを達成させるためには、どのようなことが必要なのか、達成するまでの過程を考えてみようということで考えました。

周りのサポートも要ることもあり、必要なものがたくさん出てきました。パトシリア先生の講演にもあったように、周りの人の理解を求めることも必要です。このように、これまでの講演で考えたことと関連づけをしながら考えていくことができました。

②　ロールモデル、ボランティア精神
足は歩いたり走ったりするなど、身体はどんな働き(機能)をしているのかを各国グループで考えて模造紙に書いて発表しました。そして、日本は映画監督の北野武、ロシアはプーチン大統領といった各国ごとに指名された世界で活躍している有名人を、なぜ世界で活躍できるようになったと思うかを含めて紹介しました。リーダーに必要と思うものを考えるものでした。

③　ろう文化
２日目に出されていた、「ろう者と聴者との間に生じる誤解」を演じる、という課題を各国グループごとに披露しました。呼びかけても聞こえないから気づかないことからトラブルになる、手話表現の１つである指差し(位置を示す)と知らず、何があるのか、と不思議がるなどが出てきました。「分かる、分かる」と共感の拍手もおこり、見ていて楽しかったです。

④　Russia　文化紹介

１人１人の生い立ち、大学紹介、ロシアの各地域を景色の写真で紹介、伝統の踊りの披露をしていました。さすが、工科大学であってパソコンを使いこなしていました。地域の写真は、美しい景色ばかりで、「日本にも似たようなところが。」「ヨーロッパにも似たような建物が。」といったものもあり、つっこみたくなる気持ちをこらえて、写真が多いなぁ、と関心をもって見ていました。１人の学生はバレーボールでデフリンピックに出場する！と夢を語っていました。夢が叶うことを祈って★

８月１４日　７日目

①　大学から「実社会」への移行

大学の外にある「実社会」と関わることについて、自分を見つめ直そう、という時間でした。自分は何者か、という“アイデンティティ”、価値観、権利などを考えました。会社に入社するには面接もあり、何が必要か、どのように挑むか(答えるか)なども考えていきました。よくある、自分はろう者であることを会社に伝えること、電話ができない代わりの方法を伝える方法が出ていました。社会人に出てから、今までと違ったところから、ろう者ということを意識することもあるかもしれません。全て自分に関わることで、見通しを持って行動することが求められてくるようになります。考えることが必要と教えられ、考えていたつもりだったけれど、まだ考えが少ないことに気づくことができました。

②　人間関係づくり

人間関係づくりのために、どんなものが必要なのかを考え、話し合いました。

③　研修を通して学んだことなどの発表

１週間の研修を通して、考えたことや学んだことを各国グループでパワーポイントを使いながら発表しました。

④　卒業式(パーティ)

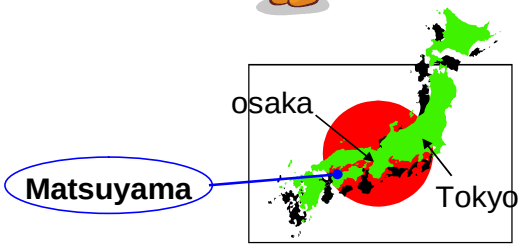
デカロ先生から１人ずつ参加証明書(卒業証)を与えられました。１人ずつ与えられているのを見て、こんなことがあったな、こんなに考えていたな、などを思い出しました。４カ国約２０名の学生達と出会って、共に過ごせて良かったです。

What's Big event by Hanae for the Institute?

Patricia A. Mudgett-DeCaro said to me "Matsuyama is one of favorite place in Japan."
So, I feel very happy, because I don't think said about "Matsuyama" on over from Japan!
I really feel happy!! Patricia A. Mudgett-DeCaro, thank you very much!!

Everyone when come to Japan, come to Matsuyama!

There are in the Matsuyama…
・Dogo hot springs
;one of Japan's oldest and most famous hot springs
etc...



総まとめ

イギリスのハーストモンソー城にいた１週間は本当に「あっという間」で時間の流れが速く、日が短く感じられました。研修が始まるまで、「リーダーとは？」というものを考えることはありませんでした。この研修に参加してから、日本から国際へと幅が宇宙へいったかのようにポーンと幅が広がり、別の時世にいたような感覚の中でした。細胞のようにどんどん吸収できる場でしたが、人には制限があるようで、少しずつ考えさせられ、１人になった時はほとんど考えていました。もちろん、このレポートを書く中でも、振り返っては新たに考えました。

８月９日に、北京オリンピックが始まるのと同時にロンドンへ発ちました。次の４年後はロンドンでオリンピックが開催される予定です。全然惜しく無いことですが、私としては惜しい、と思います。空港などで選手を見られたり、ロンドン観光で応援していたりしていたのかもしれないからです。研修がほとんどですが、１つの楽しみもあってもいいと思います。

今回、お世話になった「ハーストモンソー城」はロンドン(ヒースロー空港)からバスで約２時間のところにあります。道の途中には、タイミングが難しそうなロータリー、広い牧場で放し飼い(野生かも)の動物たちがたくさん見られます。宿泊所の前でもある朝にはリスが出てきて、初めて見て感激でした。私にとっては広い自然に囲まれた落ち着いた場所でした。

研修中は正直にいうと、イギリスですから英語はもちろん、ASL 強かったです。通訳のおかげで発表は私達の意見や考えを伝えることができました。本当に日本手話―日本語通訳の白澤先生と磯田さん、日本語―英語通訳の河合先生と高木さんの通訳のコンビネーションプレーには脱帽です。聞き取れない時は聞き返したり、通訳中と示してい

たり、と情報が与えられていることと伝えていることが眼に見えて安心しました。また、引率の佐藤先生には渡英前からメールを流すなどの手厚いサポートをいただいていたので、事前準備から当日の行動などにスムーズにとりかかることができました。このように、先生達のサポートがあったおかげで研修中は大きな心配もなく過ごすことができたことに、感謝しています。

今回はビザの関係でフィリピンが出席できなかったのは非常に残念ですが、彼らも楽しみにしていたことでしょう。違う形でお会いすることができたら、と思います。

他の国の学生と会話は ASL やジェスチャー、英語でやりとりをしました。相手の表現は豊かで面白いですが、想像できない時は苦戦しました。共通の認識があるときはすぐに通じるし、違っていて分からなければ通じないし、不思議で世界のおとぎ話の世界を回って住んでいるかのような感覚に包まれ、毎日が楽しかったです。

中国では、まだ障がい者に運転免許の獲得を認められていないそうです。日本でも運動があって条件付きで認められるようになり、最近でも条件が変わってきたりしていて、欧米の話を聞いていると日本は遅れていると思っていました。ロシアの通訳者が日本の通訳者に話を聞いてきた場面もあったので、日本よりも遅れている国が意外とたくさんあるのではないか、と思いました。

デカロ先生が突然に中指を立てて出てきた姿が印象的だったので今でも覚えています。「これは何の手話か？」と各国に聞いていました。日本では上に動かして「お兄さん」になるが、日本以外の国は全てが「クソ！」など相手に喧嘩をあおるような意味になる、ということで、異文化を知ることの必要性を示していました。お互いを知ることから始まるということだとおもいます。そして、デカロ先生がこのような行為をとったのも、会場中に見渡している中で日本が「お兄さん」と使っているのを見て気づいたのではないか、と思います。そうであれば、常に私達をみていた、ということになります。この洞察力もリーダーとして必要な力なのではないか、とハッとしました。常にハンテナを張って情報を収集することが必要と思いました。

休憩時間のゲームも万国共通で楽しめました。ゲームを通して、誰にでもリーダーになれる体験も設けられていて、なるほど、と思いました。幼稚教育では遊びを通して教育をします。私達にも身体を動かして覚えることもある、ということを思い出させてくれました。

最後の夜は松山が気に入っていると言って下さった、パトリシア先生に写真を見せてもらいながら、２人で話をしました。彼女が表現する手話やジェスチャーは国際手話も ASL もできない私が見ても大変分かりやすいもので、伝えようとする何かを感じました。彼女の手話は本当に不思議で、私も彼女のように表現して会話ができる人になりたい、と思いました。今になって気づいたが、これが「ロールモデル」なのだと思います。

１週間と短い期間でしたが、今までに考えていたことの答えを見つけられて明確にできたり、新たに気づくことができたり、多くのことを学ぶことがありました。他の国の学生とも交流ができて、伝えるのに工夫する楽しさを味わいました。本当に短い出会いから長い出会いがあり、メールをするなどで人間関係を保つことも必要ではないか、と思います。

最後にイギリスに行く人へのアドバイスですが、乾燥肌になりやすいので（特に女性）滞在中はクリームを常用することをオススメします。

１週間だけでしたが、振り返ってみると、小さい頭の中にある容量は凄いと思うほど、学んだことを考えさせられています。考えたことを考えただけでなく、誰かに伝えたり、誰かに聞いて教えてもらって新たなことを考えたり、自分のメモにしたり、と行動を少しでも多くできるように努めたいです。私もいつか人の役にたてる人になりたいです。

貴重な 2008 年のお盆の思い出をつくる機会を与えて下さった、多くの関係者の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。